

「問いを得る」

神戸国際大学
レイチャプレン 八代 良寛



毎年この時期に発表されるノーベル賞。生理学・医学、物理学、文学、平和など多様な分野で人類の発展に貢献した人々が選ばれその功績が称えられます。華やかな賞を受賞するその背後には、想像を超えるほどの努力と、多くの失敗があったことでしょう。

ノーベル賞受賞者やこれまで功績を残してきた哲学者や科学者の共通点は、「好奇心を失わない」ことです。「なぜ?」「どうして?」という素朴な疑問から研究は始まります。そこには、すぐに答えが出ない焦りや、誰にも理解されない孤独もあるでしょう。しかし彼らは、結果を求めるよりも「問いを持ち続けること」そのものを大切にしてきたと思います。学ぶことは「答えを得る」ことではなく「問いを得る」ことと言えるかもしれません。

大学での学びも同じかもしれません。テストで正解を出すことが目的ではなく、「なぜそうなるのか」を考え続けること、自分の頭で問いを立てることが重要といえるでしょう。

しかし大学での日々の学びや研究は、すぐに結果として見えないかもしれませんし、レポートや課題に追われていると、学ぶことの意味を見失うこともあるでしょう。それでも、少しずつ身につけていく知識や経験は、将来きっと誰かを支える力になります。たとえば仕事として医療や教育の現場で役立つこともあれば、日常において人間関係をより良く構築するツールにもなるはずです。

しかし同時に、学問や研究の先に得た、知識や技術は必ずしも自動的に人を幸せにするわけではありません。歴史を振り返れば、新しい発見や発明が戦争の武器に転用されたり、経済的な利益を得るために独占されたりすることもありました。知識そのものは中立であっても、それをどう使うのかによって、人を喜ばすこともあれば、傷つけてしまうこともあるのです。

聖書にはこんな言葉があります。「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」(コリントの信徒への手紙一8章1節)。学びや研究は自分を大きく見せるためではなく、隣人を生かすためにこそ用いられるべきだという教えとも受け取ることができるでしょう。「今この学びが何の意味を持つのか分からない」という疑問や迷いを持っている方は、自分のために、人のために、社会のために知識をどう生かせばいいのか。その問いをもつことが、現代の学びにおいて必要な視点かもしれません。

ひとくちメモ

先日、主教按手式が行われ本学の理事長が日本聖公会の神戸教区の主教となりました。英国聖公会においても約1年間空位であったカンタベリー大主教が1400年間の歴史ではじめて女性が選出されました。カンタベリー大主教とは英国聖公会と世界各地の聖公会共同体(Anglican Communion)における最高位であり、精神的指導者とされている。

